

薬用植物園かわらばん

いま、こんな草木も楽しめますよ！
草木に囲まれ心も体もリフレッシュ…



2020年
7月27日
第99号



キバナオランダセンニチ (キク科)

今、第一圃場では、葉の間から黄色の頭状花をいっぱい葉の間からつき出している、とてもユーモラスな花達が見られます。熱帯アメリカ原産の一年草で、我が国には江戸時代後期から明治初期に渡来したとの記述があります。頭花にはサンショウの成分、サンショオールとよく似た化学構造を持つスピラントールを含み、同様の刺激的な辛味と舌がしびれるような独特の風味があり、生のままスープなどの料理の風味づけに使います。茎や葉は「ハトウガラシ」と呼ばれ、サラダなどにして食べます。中国でも伝統医学の中医学では使用されませんが、消炎、収斂、止痛などに対する民間薬として用いているようです。なお、同属で花の頂部が褐色のオランダセンニチには、この刺激成分含有量が少なく、辛味が弱く鑑賞用とされます。

ケイトウ (ヒユ科)

第二圃場では、ロウソクの炎のような花が沢山見られます。アジアまたはアフリカ原産で、熱帯の荒地に広く分布しています。日本には奈良時代に中国を経由して渡来し、鑑賞用として栽培されています。名前の由来は、花穂がニワトリ（鶏）の頭に見えることから。本園にあるものは、かつての新エングラ体系ではノゲイトウの名が付いていたもので、公園などで見られる園芸種のケイトウと異なる種とされていましたが、現在のAPG IV分類体系では両者は同じ種とされ、品種の違いとなりました。これらは漢方医学では使用しませんが、中医学では、ノゲイトウの全草が青葙（せいそう）、種子が青葙子（せいそうし）と呼ぶ生薬となり、それぞれ清熱燥湿および清肝明目を目的として、ケイトウの種子が鶏冠子（けいかんし）と呼ぶ生薬となり、止血涼血を目的として使用しますが、両者が同じ種となると、この薬能の違いはこれからどうなるのでしょうかね。

今、こんな草木が
楽しめます！！